



Title	矗華苓論
Author(s)	島田, 順子
Citation	大阪大学, 2002, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/58752
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed 大阪大学の博士論文について

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏 名	島田順子			
本籍（国籍）				
学位の種類	博士（言語文化学）			
学位記番号	甲第12号			
学位授与年月日	平成14年3月27日			
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当 課程博士			
研究科及び専攻	言語社会研究科言語社会専攻			
学位論文題目	聶華苓論			
論文審査委員	主査	教授	是永駿	
	副査	教授	杉村博文	
	副査	教授	宮本正興	
	副査	教授	南田みどり	
	副査	教授	田中泰子	

論文の内容要旨

0. はじめに

米国アイオワ州在住の作家聶華苓は、アイオワ大学「国際創作プログラム」(IWP)の主宰者としても知られ、創作以外の仕事に多くの時間を費したため作品数は多くはないが、作中に作者自身の移動経験の反映を見ることができる。聶華苓の創作の頂点と見なされる長編小説『桑青と桃紅（桑青與桃紅）』は、その性描写や政治関連の記述により、1970年末からの台湾新聞連載が途中で打ち切られ、1980年の大陸版も内容が大幅に削除されるなど、出版過程において曲折を経た作品である。テーマや手法の面から見ても、1970年当時、中国の外に身を置く作家でなければ書けない作品であったが、発表から30年を経た現在でも版を重ね、新たな解釈を呼び込んでいる。時代を超えて異なった読みを受け入れ続ける『桑青と桃紅』は、検討に値する興味深いテクストであると言える。本稿は、1章で作品にも色濃く反映する作者自身の人生の足跡をたどり、2章で代表作『桑青と桃紅』を複数の観点から詳細に分析することにより、作家聶華苓がどのような道程を歩み、創作において何を成し得たのかを明らかにすることを目指す。

1. 聶華苓伝

1. 1 武漢の幼年期（1925～38年）

聶華苓は1925年、武漢の読書人家系出身の父と宜昌の豪族の娘である母の長女として、湖北省宜昌に生まれる。父母の結婚は、多くの跡継ぎを望んだ父方の祖父が、既に妻子のあった父に若い二人目の妻を娶らせたものであり、母は結婚後もしばらく夫が故郷に妻子

を持つ身であることを知らなかった。聶華苓は二組の母子を含む三世代が同居する武漢の大家庭で育つ。1935年に軍閥の一派広西派所属の父が任地貴州で紅軍に殺された後、抗日戦争の影響で母は聶華苓ら4人の子供を連れ宜昌へ移動する。

1. 2 抗日戦期の「流亡学生」時代（1938～48年）

勉学のため、母、弟妹と離れ一人で湖北、四川の長江周辺を移り住む。戦後、重慶から南京に戻った中央大学の外文系を卒業する。

1. 3 台湾の日々（1948～64年）

大学時代の同級生と北平で結婚するが、共産党の北平入城後台湾へ渡る。台北で本格的に創作活動を開始し、夫が海外に長期滞在する間、母、弟妹、二人の娘との生活を支えるため、『自由中国』文芸欄の編集や大学教師の仕事なども同時にこなす。『自由中国』封鎖後、困難な時期を経て15年間暮らした台湾を離れ米国へ渡る。

1. 4 アイオワの家（1964年～）

アイオワ大学で教鞭をとる一方、後に二番目の夫となる詩人ポール・エングルと「国際創作プログラム」を創設し、毎年世界各国から作家や詩人をアイオワ大学に招く。1970年に代表作『桑青と桃紅』を完成させ、1978年には30年ぶりに中国への帰郷を果たす。1991年エングルの死後、アイオワで一人住まいを続ける。

1. 5 作家が語る自身の「根」——『三十年後』

渡米後もずっと、自らが民族としての中国人であるという認識を堅持した聶華苓は、母語を「根」とし中国語で創作を続けたが、良きパートナーであったエングルの死後、亡き夫への思慕から心境に変化を生じ、米国社会にアイデンティティーを認め帰属感を抱くようになる。母語が「根」であるという聶華苓の思いは今も変わらず、「根」という語が変化していく人間の変わらぬ部分を象徴しているようであるが、聶華苓はエングルとの死別を経て初めて、真に米国に対して心を開くようになったと言えるのではないだろうか。

2. 長編小説『桑青と桃紅』分析

2. 0 テクストの成立

『桑青と桃紅』は香港『明報月刊』（1970～72年）の連載が完全な形での初出で、その後、著者自身による修正版や、外部からの干渉を受けた削除・変更版、各国語への翻訳版などいくつもの異なった版を持つこととなる。

2. 1 ストーリーと登場人物

この作品には主人公桑青の人生の四つの時期が描かれ、物語は彼女の日記の中で進展す

る。抗日戦末期の1945年、共産党北平入城前後の48～49年、桑青渡台後の57～59年、及び渡米後の69～70年が、それぞれ小説の第一部から第四部となる。各部の最初（初出のみ最後）には桑青のもう一つの人格「桃紅」が米国移民局に出した手紙が置かれ、これらをはさんで最初に「序（楔子）」、最後に「跋」という構成である。第一部で家出し友人と共に長江を遡り、重慶を目指した16歳の少女桑青は、南京、北平を経て台湾へ渡り、第四部で米国に至って後、正反対の人格「桃紅」の出現に脅かされるようになる。第四部の日記は半分以上桃紅が記し、桑青は過去と現在が交錯する句読点も乱れがちの文章を断片的に綴るのみとなり、最後には完全に桃紅に取って代わられる。

2. 2 コラージュが生み出す混沌——作中の「挿話」について

この小説は桑青の日記と桃紅の手紙から成る。「序」と「跋」を除けば、語り手は桑青であれ桃紅であれ常に「私」であり、「私」の語りの中にまた他の登場人物が語る物語や、彼らが記した日記・創作などが現れるという二重構造になっている。桑青（桃紅）が目にし耳にするものとして、さまざまな形で現れる数多くの「挿話」は、本筋と直接には関係を持たない。作者がこの作品で書いたという離散・恐れ・殺し合い・逃亡といった「人類の境遇」が挿話の中でも同じようにテーマとなる一方、作品の舞台設定などに見られる諷刺と結びついた象徴が挿話においても多用される。テーマを共有する、共に諷刺・象徴を用いるという点で各挿話は作品全体と「相似形」を成すが、独立した存在でもあるこれらの挿話が雑然と置かれることで作中に一種の混沌が形成される。これは桑青が通過していく中国、台湾、米国のそれぞれの時代の混沌とも通じ、時代感覚の表現となっている。つまり、各挿話はこの作品を形作る重要な構成要素であり、『桑青と桃紅』は全編に挿話を「貼り込んだ」コラージュ作品なのである。

2. 3 分裂と二重性——多義的なテクストとしての『桑青と桃紅』

本作品は当初、歴史の悲劇として読まれることが多かったが、最近では桑青の二重人格が移民のアイデンティティーの問題として捉えられたり、フェミニズムの視点から従来の価値観を覆す桃紅の肯定的な面が注目されるなど、さまざまな解釈が出されている。『桑青と桃紅』のテクストとしての多義性は、作品の中に存在する「分裂」と「二重性」によっている。作中の「分裂」とは、一つは桑青と桃紅の分裂であり、もう一つは登場人物たちの行動に見られる人の心の分裂である。理由を説明せずに人の行動それのみを描いたこの小説では、作中人物の心が一つの枠の中に固定されずに無限の広がりを持つこととなり、人の心の分裂もそのままそこに姿を現したのである。一方、作中の「二重性」とは、主人公の個人的事情による移動と中国人の歴史的要因による移動が重なること、現実の描写に

象徴的意義がオーバーラップすることであり、一つの場面に二重の意味が生じている。

分裂し、何重にも重なり合うそれらの部分のどこに焦点を当てるかによって、作品が見せる相貌は大きく異なってくる。桑青と桃紅の分裂に焦点を当てれば、フェミニズムやアイデンティティー・クライシスの問題を読み取ることができ、意味の二重性に焦点を当てれば、中国人の歴史の悲劇や中国の境遇に関する寓話が浮かび上がる。『桑青と桃紅』はさまざまな読みをすべて呑み込む多義的なテキストであり、分裂した存在である人を説明なく描いたこの作品の複雑さは、人の複雑さそのものでもある。これは人を描くことに力を傾注してきた、聶華苓の創作における一つの到達点をも示しているのである。

2. 4 聶華苓の著作における『桑青と桃紅』の位置

反共文学が主流であった50年代台湾文壇において、聶華苓は大陸から台湾に渡った普通の人々を描き、短編小説集『翡翠猫』（59年）、『一輪の白い花（一朶小白花）』（63年）にまとめる。作中の「根を失った人」たちは台湾の現実に陥ったまま動けなくなり、或いは幻想の世界に逃げ込み、或いは異性との関係や賭け麻雀に逃避しようとするが、これは一つの境遇の中で人が示すある反応であり、『桑青と桃紅』で更に多様な形へと発展していく。台湾時期の短篇小説には、常に「人」を描こうとした聶華苓の創作の原点を見ることができる。台湾における長編小説第一作『なくした金の鈴（失去的金鈴子）』（61年）は喪失と成長の物語であり、渡米後の『桑青と桃紅』に続く長編小説『山の彼方、川は流れ（千山外、水長流）』（84年）では、主人公の「根」探しが描かれる。その後の中編小説「死のデート（死亡的幽会）」（86年）に見られるのは死と再生の旅であるが、もはや「根」や帰属は問題とされない。

作者の移動経験が最も端的な形で反映する『桑青と桃紅』は、演劇的構成、コラージュ、諷刺を伴う象徴、「意識の流れ」など種々の技法によって時代の感覚を鋭く表現しているばかりでなく、その多義的な複雑さにおいても聶華苓の著作の中で突出しており、今後もさまざまな解釈を受け入れ、時代を超えて読み継がれていく可能性を持つ唯一の作品であるという意味で、間違いなく聶華苓の代表作と言える。

2. 5 初出と初版の異同について

1970～72年の香港『明報月刊』連載の初出から4年を経て、76年に香港の友聯出版社から出される『桑青と桃紅』の単行本初版において、作者は大幅な修正を行っている。これは80年の大陸版におけるような外部からの干渉を受けてはおらず、すべて作者の手によるものである。この修正では誤植や字句の改正によって文章が整えられたばかりでなく、第一部から第四部の最後に置かれていた桃紅の手紙が、各部の最初に移されるといった構成

上の大きな変更も行われている。ここで注意を引かれるのは政治関連部分の削除であり、国民党・共産党に関する記述は全編にわたって削除・変更が見られる。作者は修正の理由を「文章を整えるため」と述べており、政治的な要因を明確に否定しているが、それらの削除からは、1974年に中国への帰国申請を始めたという作者の共産党に対する配慮が感じられる。理由はどうあれ、初出時の『桑青と桃紅』が持つ混沌の衝撃力と諷刺の毒が、修正によって弱められたのは残念なことである。

3. おわりに

米国で書かれた『桑青と桃紅』が発表されたのは中国語圏であったが、中国や台湾では政治的な観点からの作品評価を受けるばかりでなく、発表の段階から政治の影響を免ることはできなかった。この作品の英訳版がアジア系米国文学史の中で語られるようになつたのも最近のことであり、米国で中国語による創作を続けることにはさまざまな困難が伴うが、聶華苓にとってそれは重要なことであった。聶華苓の「国際創作プログラム」における業績はすでに認められているものの、創作活動の頂点とも言える『桑青と桃紅』は、現時点でもまだ正当な評価を受けてはいないように思われる。本稿が今後の研究の一助となることを願う。

4. 聶華苓年譜

4. 1 人生

4. 2 作品

5. 資料

5. 1 聶華苓インタビュー

5. 2 聶華苓関係資料

論文審査の結果の要旨

本博士論文は、在米の華人作家である聶華苓の伝記作成および代表作『桑青と桃紅』の分析、解説を通して聶華苓の全貌に迫ろうとする意欲的な労作である。海外の華人作家は本国中国の現代文学史においてほとんど触れられず、日本の中国現代文学研究でも未開拓の領域に属する。筆者は既刊の文献資料の丹念な探査に加え、作家が居住するアイオワに赴いて作家自身にインタビューを行い、さらには作家が執筆中の回想録についてもその一部を入手して資料の万全を期しており、『桑青と桃紅』のテクスト成立過程ならびに各テ

クスト間の異同の分析はゆるぎない基礎的な作業となっている。筆者の問題意識は、作品の多義性とともに、中国大陆、台湾、米国と移動した作者の「根」の意識にも向けられている。『桑青と桃紅』の主人公桑青は作者と同じように大陸、台湾、米国と移動する過程で精神の分裂をきたし、別の人格である「桃紅」が現れ、両者のせめぎあいの中で流浪し続ける。その移動と分裂が多元的な視点を生み、作品にはおびただしい挿話が嵌め込まれる。この挿話群を「コラージュ」構造ととらえ、作品に混沌をもたらすとともに、全体としての統一感を保っているとの分析は独創的である。桑青と桃紅とが自然に共存する状態が回復された時、初めて桑青が「神聖さ」を取り戻し、桃紅が「希望」に輝くことができるのではないかとの読みも、筆者のこの作品に対する深い解説から導き出されたものである。

『桑青と桃紅』はこれまで、精神の分裂を描いた悲劇として読み解かれてきたが、90年代以降、グローバルな現象としての根の喪失、アジア系米国移民のディアスボラ的状況の下での文化・言語の二重性、心の分裂のメタファーとして捉える解釈、「桃紅」の行動に家父長制イデオロギーや男性霸権を浸食、破壊する女性の自立と自由を読み取るフェミニズム解釈など多義的な読みが展開されている。これら先行研究がいずれも部分的な読みに終始しており、この作品の全体像を捉えるには至っていないとの筆者の指摘は、いくつもの二重性と分裂を抱え、複雑に分裂し、幾重にも重なり合う各部分の総体として『桑青と桃紅』を捉えた本論文の論点に照らして適切なものである。しかし、先行研究については、どのような評価がどの程度なされたのかなどの整理をさらに徹底させる必要があろう。

作者聶華苓が母語である中国語に「根」を求めている点については、その意識をもたらした中国文明、文化における言語の重みについての分析、言及があるべきであろう。一方、言語・国家・民族といったものを背景にしないアイデンティティーの成立もありうるのであり、必ずしも母語に執着しない西欧やアフリカなどの作家との比較対照も必要となろう。文学史的位置づけについては今後の課題であるが、亡命作家を含めて再構築がなされているロシア文学史の例なども参考に、中国文学史的位置づけの考察へと進むことが望まれる。

これらのさらに探求されるべき課題はあるものの、これまで中国と米国の文学史から体よく締め出されてきた聶華苓についての、本論文は日本で初めてのまとまった論考であり、その独創的な作品分析、周到な伝記記述、貴重なインタビュー記録はいずれも出色の成果と言える。今後の聶華苓研究がまずこの論文をひとことから始まるのは疑いを入れない。本論文が博士学位にふさわしいものである点について審査委員全員の意見の一致を見た。